主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	石井 雅巳

主 論 文 題 名：

レヴィナス哲学における時間の脱形式化

（内容の要旨）

本論文は、エマニュエル・レヴィナス(1906–1995)における時間に関する思考を主題としている。その最終的な目的は、レヴィナスのテクストにおいて時間という主題がいかに展開されていったのかを通覧するだけに留まらず、そこでの時間論の特徴を析出することで、時間がレヴィナス哲学の生成や変遷そのものを牽引する中心的な論点であったと示すことにある。

これまでレヴィナスの思想は、主著である『全体性と無限』(1961)や『存在の彼方へ』(1974)で語られる、私とは非対称的に捉えられる特異な他者との倫理的関係がその中心的な論点として提示されることが多かったと言える。しかし、近年の草稿研究がその一端を明らかにしたように、キャリアの当初から倫理という主題が展開されていたわけではない。そのため、あらためてレヴィナス哲学をいかなる角度から語り直すかは、現在の研究者たちにとっての大きな関心事と言える。とはいえ、本論文の関心は、レヴィナス哲学の中心が倫理か否かという問題ではなく、むしろ、倫理のみならず、享受やエロスといったレヴィナスのテクストに現れる様々な論点がいかなる背景のもとで、どのような問題意識で展開されていったのかということにあり、本論文は、諸主題の背景にあってそれらの展開を突き動かしているものこそ、時間であると明らかにしたいと考える。

もちろん、レヴィナスの思想を時間という観点から読解した研究がないわけではない。しかしながら、従来の研究は、フッサールやハイデガーの時間論との対比からのみレヴィナスの時間性を検討するものや、主だった著作ないしテクストの特定の箇所における時間に関する議論に着目するものが大部分を占めており、レヴィナスの哲学全体を時間という観点から包括的に解釈する試みは 2010 年代に入ってからだと言える。

近年の先行研究は、レヴィナスのテクストにおける時間的なものの包括的な紹介や鋭い分析を含むものの、幾分総花式と思われるきらいがないわけではない。すなわち、レヴィナスの哲学的テクストにおいて、いかに時間が中心的な論点であるかやレヴィナスが過去の哲学者と時間をめぐっていかなる対決をしていたかについては語られるものの、当のレヴィナス自身の時間に関する議論がどのような地点を目指して展開されており、レヴィナスによる時間をめぐる議論が総体として何を主張しているのかといった論

点は十分には論じられていないように思われる。

こうした課題に対する一つの応答として、本論文がその全体を通して提示したいのは、「時間の脱形式化」という論点こそ、レヴィナスの時間論と言うべき議論の実質を形づくっているということである。「時間の脱形式化」ないし「時間の観念の脱形式化」という言葉は、たしかに 1980 年代後半に発表された晩年のテクストにおいてのみ現れるものである。しかし、本論文の解する限り、それは決してレヴィナスが晩年にのみ取り組んでいたものではなく、むしろ生涯を通して常にレヴィナスの関心事であり、実際に数々の著作において展開されていた。

レヴィナスが語る「時間の脱形式化」は、一方で、時間を過去から未来へと川のように一定かつ不可逆に流れるものとして捉える表象や時計的な時間理解、あるいはカントのように、空間と並び、時間をアプリオリな直観の形式として考える発想を拒否し、時間のうちに断絶や可逆性、他なるものの介入を見出すことで、時間を形式的な図式から解放することを意味している。他方で、それは私が私であるという自己の存在を記述する際に、生の具体的な経験から時間を考察することで、時間の形式よりもその内実への着目を示すものである。すなわち、時間の形式を脱すると述べた場合、その形式性そのものを破壊するものと、形式の対となる内容を重視するものという二つの意味が同時に込められている。

こうした「時間の脱形式化」という図式からレヴィナスの思想を眺めた場合、早くもキャリアの開始時期である 1930 年代の著作に見出され、「捕囚手帳」や『実存から実存者へ』など 1940 年代の諸テクストを貫き、『全体性と無限』の「繁殖性」において結実する「決定的なもの」から「非決定的もの」へというレヴィナス哲学の動向や、その後『存在の彼方へ』を中心とする後期思想において、「痕跡」概念の前景化とともに、再現前化できず記憶しえない過去を示す「隔時性」の次元は、いずれも「時間の脱形式化」の試みの一つとして再解釈できるだろう。それだけに留まらず、本論文は最終的に、第 1 章から第 7 章までの議論すべてがそれぞれの仕方で、「時間の脱形式化」の二つある特徴のうちのいずれかを表現するものであると主張する。

以上によって、本論文はレヴィナスの思考の展開を一貫して時間という観点から再解釈し、レヴィナスの思考の歩みが時間を根底から再考し、その形式性から解き放つものへと捧げられていたと結論づける。

本論文は大きく分けて三つの部から構成されている。

第 I 部は、1930 年から第二次大戦後までのいわゆる前期のテクストを主な分析対象とし、そこでレヴィナスがいかなる時間性を語っていたかを主題としている。

主　論　文　要　旨

第1章では、フランスへ現象学を本格的に紹介することになったレヴィナスのテクストを扱い、彼がフッサールおよびハイデガーの現象学をいかに受容したかを「歴史性」という時間的な概念に着目して整理している。第一に、本章は最初期のレヴィナスによるフッサールの批判的読解とハイデガーへの肯定的な評価に焦点を当てている。そこで析出されるのは、レヴィナスにとって現象学が取り組むことができる重要なテーマとは、志向性を意識の存在論的特徴として措定した上で、我々の生という存在の意味を、歴史性という具体的な状況のうちで実践的な観点から探求するというものである。こうしたレヴィナスによる問題関心を指摘することで、本論文は、理論的・観念論的性格を先鋭化されていくフッサールに対してレヴィナスが「主知主義」との批判を加えるとともに、私の存在の意味を具体的な歴史的状況のうちで探求するハイデガーの議論を高く評価する経緯を説明している。第二に、本章はレヴィナスが戦後になってハイデガーに批判的な評価を下すようになる際にも、歴史性が重要な役割を担っている点を指摘した。レヴィナスは、ハイデガーの存在論が脱自における未来の時間性を優先し、そこへと過去の時間性を従属させてしまうがゆえに、ハイデガーの議論もまた、歴史のなかで生きる具体的な生を観念論化してしまうものであると考えるに至るからである。かくして本論文は、歴史性という具体的な時間のなかで我々の生を記述するというレヴィナスなりの現象学の眼目に注目することによって、レヴィナスによるフッサールとハイデガーへの接近と離反を一貫した観点から説明することが可能となっている。

第2章では、第二次大戦中に書き溜められた草稿類を踏まえつつ、1940年代の代表作『実存から実存者へ』(1947)を主たるテクストとして扱い、前期レヴィナスが「決定的なもの」への繋縛とそこから「非決定的なもの」への解放を救済として時間論的に語っていることを提示している。『実存から実存者へ』においてレヴィナスは、存在者なき存在そのものである「イリヤ」から出発し、私という存在者が生起するさまを語っているが、そこで問題となるのが、主体が他でもない自分自身の存在へと繋縛されているという「決定的なもの」と言われる次元である。「決定的なもの」は孤立した主体が現在へと釘付けにされていることを意味しており、過去や未来との時間の流れからは隔絶された時間の停止としても表現される。その際本論文は、この自己繋縛から解放されるためにレヴィナスがデカルトの「連続創造説」と呼ばれる議論を参照していることに注目した。連続創造説を踏まえることで、本論文は、時間が過去から未来へと途切れることなく持続する描像を拒否しつつも、相互に独立する瞬間そのものに閉じ込められている「決定的なもの」が神という他なるものの介入によって時間の流れや「決定的なもの」からの救済が可能になるというレヴィナス独自のメシア論を説明している。

第II部は、レヴィナス第一の主著『全体性と無限』を時間論として読解するものであり、ここ

に含まれる本論文の第3章から第5章は、それぞれ同書の実質的な本論をなす第二部から第四部に概ね対応している。

第3章では、享受やエコノミーという語で語られる主体性に関わるレヴィナスの記述を時間の観点から整理し、主体性の構造が瞬間的な享受を維持しつつも、現在を中心に、過去や未来に自身の目的や関心のもとでアクセスできる時間が可能になる議論として『全体性と無限』の第二部を読み直している。第一に、レヴィナスは享受を、感覚的な質を他の目的に関連づけることなくそれ自体としてただ楽しんで生きる在り方として提示している。ゆえに享受の時間性は、過去も未来も気にかけず、伸び広がりのある時間を特定の目的や目標のために使用することもない、瞬間的・刹那的なものである。第二に、エコノミーにおいて主体は、自らの支配が届く圏域を切り開くことで、将来或る目的を達成するためには、いまなにをすべきかを考え、実行できるようになる。つまりエコノミーの「私」は、予料やそれを介した合理的な行為の遂行が可能な主体を指す。そのため、エコノミーが示すのは、現在を中心に、過去を保持しつつ、未来に可能性を投げかけ予測することで、 統御しうる時間の範囲を広げるような幅をもった時間性であると言える。これまで『全体性と無限』の主体性論は自己の外にあるものを我が物に同化・吸収する〈同〉の圏域として空間論的に解釈されることが多かったが、主体性を時間から考察する本論文の解釈は先行研究を補完するものとなると思われる。

第4章は、他者との倫理的関係のうちに見出される先行性という順序の問題に着目し、これまであまり顧みられることのなかったものの、時間や順序による規定がレヴィナス的「倫理」において要求される諸特徴――自我の自存と他者の無限――を可能にしている点を明確化している。レヴィナスは『全体性と無限』において、自我が他なるものに先行していると語るとともに、他者が自我に先行するとも述べている。一方で、自我の先行性は、他者との関係の手前で自我が成立することで、倫理的関係において主題となる自我の所有や振る舞いという責任の所在を確保することに寄与するものである。他方で、他者の先行性は、自我が関係をもつ他者の超越や無限という性格を表現しており、その先行性は原因が探求の末に事後的に知られる順序を示すものである。本論文は、両先行性を解釈するにあたり、レヴィナスがデカルト『省察』における議論構成に着目している点を指摘し、自我の先行性は我々の「認識のうえで」先に知られる時間系列上の順序であり、他者の先行性は「認識のうえでは」時間的に後から知られるものが「事柄そのものに即して」見た場合には論理的に先行している順序として解釈することで、両者が矛盾するものではないとの見解を提示した。

第5章では、『全体性と無限』第四部で展開される、エロスや繁殖性といった主題を扱っている。これまでレヴィナスのエロスは「女性的なもの」との身体的・情動的な関係として解釈されれてきたが、本論文はエロスが死と同様に、「未だない」という未来の時間性を示すものである点に目を向けている。エロスにおける「未だない」とは、その未来がいつ到来するかだけでなく、

そもそも探求されているものが何であり、それは到来しうるものであるのか否かすらわからないような他者性の次元を指し示すものである。ゆえに本論文は、女性的なものをめぐる議論が予期や投企といった主体の権能には回収されない未来の時間性を考察したものであると主張した。

次いで本論文は、繁殖性を読解するにあたり、これまでフェミニズムの側から向けられてきた批判を引き受けつつ、繁殖性を歴史批判と赦しという二つの論脈において解釈した。本論文が解釈するところ、歴史批判における繁殖性は、歴史家による暴力に抵抗すべく、私の意志が子へと引き継がれることで、誰もその生を肩代わりすることができないという私の存在がもつ「決定的なもの」からの救済を意味しており、他方で、赦しとしての繁殖性もまた、私以外が担うことができず、抹消しえない己の過誤が他者から赦されることで、私は生まれ変わるかのように、それまでの自己の存在から解放される事態を明かすものである。繁殖性における「私は私の子である」という難解な表現は、自己の存在への繋縛から抜け出し、私の存在を新たな仕方で考察し直すことを意味しており、それゆえに繁殖性の議論は、「決定的なもの」から「非決定的なもの」へというレヴィナスが初期に打ち出していた課題を我々の生に伴う豊かな内実とともに展開したものと捉えることができる。

第 III 部は、第二の主著『存在の彼方へ』を中心とする後期著作において語られる時間性を解釈するものである。

第 6 章では、1965 年の論文「志向性と感覚」を参照することで、「隔時性」というレヴィナスの後期テクストで重要な役割を担う時間構造がフッサール時間論との対決によって析出されたという解釈を提示している。『全体性と無限』以降のいわゆる後期著作において、他者は私の目の前に現前することはなく、「痕跡」や「隔時性」と呼ばれる次元に位置づけられる。レヴィナスが語る他者の痕跡とは、それを残した者が過ぎ去ってしまったということだけが与えられるために、追跡不能な謎や思い出しえない過去としてのみ語られる。ゆえに、私は他者を再現前化や記憶によって現在へともたらすことはできず、主体は常に他者に遅れてしまうという時間的なズレが隔時性として語られる。しかし、隔時性がなぜ可能となっているのかについて先行研究の掘り下げは十分ではあるとは言い難い。そこで本論文は、第一に、「志向性と感覚」におけるレヴィナスによるフッサール時間論解釈に着目し、後期思想の鍵概念である隔時性の構造がいかに析出されたかを分析した。とりわけ、時間の構成において、意識が現在の源泉点である原印象に遅れてしまうという事態を積極的なものとして捉え返すことで、レヴィナスが意識のうちに予見不可能な仕方で他なるものが入り込んでしまっているという隔時性の原型を見出していることを明らかにした。第二に、隔時性という時間構造を獲得することで、後期レヴィナスの倫理思想が得た意義や特徴について考察し、私は他者からの呼びかけに常に遅れてしまうという時間的な

隔たりゆえに、私は遅刻したという罪あるものとして規定され、後期のテクストでは倫理の必然性や逃れがたさをより強固に展開することが可能となっていると指摘した。

第7章は、本論文第II部第5章で扱った歴史批判という論点が有していた課題をその後レヴィナスが引き受け直し、過去や歴史との間に肯定的で倫理的な関係を模索していたことを「証言」と「書物」という主題のもとで明らかにする。『全体性と無限』の議論は、歴史記述が勝者にとって都合の良い物語として書かれ、個々人の意志を直接的にではなく、その所産からのみ理解してしまう点を批判するあまり、過去や死者といかなる積極的な関係も持ちえないやや偏狭な構成となってしまっている。本論文は、第一に、のちのレヴィナスが歴史記述への危機感を保持しつつも、他者の死を安易な物語として消費して終わらせることなく、絶えざる語り直しによってその死を悼み、その者が生きていたことを証言する試みのうちに、過去の他者を暴力なしに辛うじて語りうる次元を見出した。第二に、「書物」が作者以外の者によって解釈され、そこに作者が込めた意図を超える新たな思想が生まれ出ることを後期レヴィナスが肯定的に語っていることを踏まえることで、本論文は『全体性と無限』期までは歴史記述に潜む暴力として退けた「書かれた言葉」を起点とした解釈の運動に、レヴィナスが積極的な価値を認めていることを指摘した。それによって、後期レヴィナスが自らや自らの所産が他人たちによって語られ評価されることで、いわば「歴史の一部」となることを許容するようになったと解することができるだろう。

終章では、晩年のレヴィナスが語る「時間の脱形式化」ないし「時間の観念の脱形式化」がいかなる特徴を有しているのかを整理し、その上で、本論文の議論をあらためて「時間の脱形式化」という観念のもとで解釈する。第1節では、時間の脱形式化が語られるパッセージを解釈し、この概念が、一方で時間の形式性を破壊するという特徴を、他方で形式に対して時間における生の内容の具体性を復権せるという特徴を有していることを指摘した。続いて、本論文第1章から第7章の議論はどれも、時間の脱形式化がもつ二つの特徴のいずれかに当てはまるがゆえに、本論文が扱った 1930 年代から晩年に至るまでのレヴィナスの思考の歩みはすべて「時間の脱形式化」として解釈可能であることを確認した。最後に、第2節では、前節で析出された成果をもとに、『全体性と無限』に至るまでのテクストに見出される未来への脱形式化と、後期著作において「隔時性」として結実する過去への脱形式化という仕方で、時間の脱形式化が二方向へと炸裂している点を指摘し、なぜ『全体性と無限』を境に時間の脱形式化の方向性が変わるのかという問いを提起する。それに対して本論文は、『全体性と無限』の本論の最後に位置するG節「時間と無限」において語られる「永遠なもの」という到達地点がもはや時間性という枠組みを逸脱してしまう危険性ゆえに方向の転換がなされたのだと解釈することで、上で挙げた問いに答えている。

別表６
（３）

Keio University

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name	Masami Ishii

Thesis Title

レヴィナス哲学における時間の脱形式化

The deformalization of time in Levinas's philosophy

Thesis Summary

This thesis elucidates the thinking on time found in the works of Emmanuel Levinas (1906–1995). It suggests that the deformalization of time forms the substance of Levinas's theory of time. It is true that the idea of a deformalization of time appears only in the later texts of Levinas; however, as this paper shows, this concept was a constant concern throughout Levinas's life and can be found in developed form in many of his writings.

Part I of the thesis traces the development of and transitions in Levinas's thinking about time from the 1930s to the postwar period. The first chapter investigates Levinas's early texts and summarizes his reception of Husserl's and Heidegger's phenomenology: in particular, his focus on the temporality of historicity and its relation to his criticism of Husserl and receptivity to Heidegger. In Chapter 2, this paper treats *Existence and Existents* (1947), which is Levinas's most representative work in the 1940s, as its main text, showing that Levinas in this early period describes the enchainment to the definitiveness and its liberation to the non-definitiveness as redemption from the perspective of time.

Part II is reads Levinas's first major work, *Totality and Infinity* (1961), through the perspective of time. Chapters 3–5 of this part generally correspond to Parts II–IV of *Totality and Infinity*, respectively. Chapter 3 assesses Levinas's account of subjectivity from enjoyment to economy in terms of time and rereads Part II of *Totality and Infinity* as arguing that the structure of subjectivity makes possible a time in which the past and future can be accessed for the subject's purpose and interest, centering on the present, while maintaining momentary enjoyment. Chapter 4 focuses on orders of precedence in ethical relationships with the other and examines how temporal stipulations make the characteristics required for Levinas's ethics possible. Chapter 5 deals with Eros and fecundity in Part IV of *Totality and Infinity*. The thesis reaches the point where Eros, like death, indicates a future temporality of "not yet." In addition, this chapter interprets fecundity in two contexts: criticism of history and pardoning. Ultimately, this paper proposes the view that both of these subjects can be understood to show how the definitive becomes the non-definitive.

Part III interprets temporality as discussed in Levinas's later writings, in particular, his second major work, *Otherwise than Being or Beyond Essence* (1974). Chapter 6 analyzes the article "Intentionality and Sensation" (1965) and indicates how the temporal structure of diachrony, which plays an important role in Levinas's late work, came from a confrontation with Husserl's theory of

Thesis Abstract

No. 2

time. Chapter 7 reveals how Levinas subsequently reassumed the problem of excluding the past and history from his argument, dealt with in Chapter 5 of this thesis, and began to sought a positive and ethical relationship with the past and history around the subject of the testimony and book.

In the final chapter, this thesis examines the characteristics of the deformalization of time, and then confirms that the entire argument of this paper can be reinterpreted under the concept of deformalization of time.